平成３０年度第２回　近江八幡市まち・ひと・しごと創生懇話会　議事録

（開催要領）

１　開催日時　　平成３１年３月１８日（月）　１３時００分から１６時００分

２　場　　所　　近江八幡市水道事業所　Ａ・Ｂ会議室

３　出席委員等

＜委員（敬称略・順不同）＞

秋村 田津夫（近江八幡商工会議所　会頭）
城念 久子　（オレガノ副代表）
白須 正　　（龍谷大学　政策学部　教授）
土井 勉　　（大阪大学ＣＯデザインセンター　特任教授）
江南 仁一郎（近江八幡市　総合政策部長）
※欠席：遠藤 良則　（近江八幡金融協議会／滋賀銀行八幡支店　支店長）

＜事業担当課・事務局＞

川嶋 徳文　（文化観光課　課長補佐）
坂田 孝彦　（文化観光課　課長補佐）
永田 修　　（文化観光課　課長補佐）
岩越 和子　（子ども健康部　次長）
津田 幸子　（健康推進課　参事）
一二三 昌道（商工労政課　課長補佐）
岡村 泰孝　（農業振興課　課長補佐）
小島 史子　（農業振興課　主任主事）
善住 晶子　（学校教育課　課長補佐）
太田 明文　（政策推進課　課長）
栄畑 朝夕美（政策推進課　課長補佐）
森津 豊　　（政策推進課　副主幹）
茶谷 健之　（政策推進課　主任主事）
橘 直樹　　（政策推進課　主事）

＜議事次第＞

１　開会
２　事業説明、質疑・意見交換
３　全体意見交換
４　閉会

【配付資料】

資料１　：　委員名簿

資料２　：　対象事業一覧

資料３　：　事業シート

資料４　：　補足資料

資料５　：　平成３０年度第１回懇話会　報告書

＜内容＞

１．開会

〇事務局

（座長挨拶）

〇座長

本日は皆さまお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。

当懇話会も３年目、今年度２回目の開催となります。昨年７月に開催しました今年度１回目の懇話会では、事業開始にあたり委員の皆さまからご意見・アドバイスをいただきました。本日は、それを踏まえて今年度事業執行してきた成果を担当課から報告してもらい、改めて委員の皆さまからご意見をいただきます。

よろしくお願いいたします。

（欠席委員報告）

〇事務局

- 遠藤委員欠席の旨報告。

（懇話会開催の趣旨、進行方法説明）

〇事務局

（配布資料確認）

〇事務局

※以降の議事は、設置要綱第５条第２項の規定により、座長により進行。

２．事業説明、質疑・意見交換

（1）　東近江地域広域婚活事業

〇政策推進課

事業シート№.１に基づき説明。

〇委員

- 当初はこのような事業を行政が行うことに懐疑的であったが、続けることでそれなりの成果があがったことに驚いている。成婚や出産に繋がった本事業の成果も実行してこそであり、実行することの価値を改めて感じている。

〇委員

- 本年２月に、ＳＤＧｓ先進国であるデンマークからサステイニアを招いてシンポジウムを開催した。デンマークは幸福度で世界第３位の国であるが、彼ら曰く、近江八幡はもっと子ども中心のまちづくりをすべきだと話をしていた。
- 多くの人が既にできていると言うが、もっと愛情をもったまちづくりが必要である。青年期に結婚を考える前提として、幼少期から家族や社会の大切さを一緒に考えなければならない。
- それを飛ばして、大人になってしまってから、他人が設けた場で急にカップリングさせるのは難しいのではないか。
- まずは幼少期に家族や家庭の大切さを学ばせる必要があり、教育の過程でそれを進めるべきだと考える。

〇委員

- 少額予算で成果をあげていることは評価する。
- 近年、教育の面では生きる力や幸せになろうとする力の育成が不足しているように感じている。アンケート結果を見ても、行政の関わりを求める声が多いなど、他人任せである印象を受ける。このような意識を変革することが必要である。
- アンケート結果にもホテルではなく神社やお寺での開催を求める声があったが、地域を知る要素を加えることで次のステップに繋がるのではないか。
- 成婚された方をゲストに招くのも良いのではないか。プライバシーの問題などで世話役の方々の活動が縮小する中で、幸せになる方法を体感する手段として良いのではないか。

〇座長

- 委員の皆さまと同じく、このような事業を行政が行うことについては当初懐疑的であった。しかしながら、成果をあげている事実と好評なアンケート結果は評価すべきであろう。
- 目的にもあるように、成婚だけでなく職場の働き方を見直すなどの観点もより取り入れていくと尚良い。
- 来年度はどうする予定であるか。また、広域で実施するにあたり費用負担はどうなっているか。

〇政策推進課

- 来年度についても同じく東近江圏域２市２町の広域連携により進めていく予定である。費用負担については、事業シートに記載の１６万円は本市の負担分であり、別途日野町が７万円、竜王町が約３万円を負担している。

〇委員

- 国の調査などを見ていると、独身であっても若者の幸福度は思いのほか高い。むしろ、一人暮らしに慣れた若者は、結婚に対して否定的なイメージを持つことも多く、社会情勢を背景とするこのようなイメージを解消できるのかも考えなければならない。

〇座長

- これまでの成果を踏まえ、今後も続けるということであるが、委員の皆さまの意見にもあるように、もっと様々な角度から何ができるのかを考えられたい。

(2)　近江八幡市０次予防シェアリングプラットフォーム形成事業

〇健康推進課

事業シート№.２に基づき説明。

〇委員

- 高齢者の外出をどのように促すかがテーマであり、カフェの役割が大きい。人が集まり楽しんで話をする機会を創出する拠点とされたい。

〇委員

- 実際にカフェに行ってみると雰囲気の良さがよく感じられた。配膳時にご飯の量を尋ねるなど細やかな気配りがあり、人との関わりを感じられるスペースになっている。
- 建物自体もコンパクトであり、居心地の良いスペースとなっている。

- 今後は健康や地元食品に着目したメニューの拡充があると、集客面や地域の健康増進にとっても良い方向に向かうのではないか。

〇委員

- 人材育成とはサポーターのことか。また、サポーターの報償は有償か。

〇健康推進課

- そのとおり、サポーターの育成のことを指す。無償で行ってもらっている。

〇委員

- ボランティアで行うことが馴染まないことも多い中、本事業では自主的かつ積極的に活動されており素晴らしいことである。

〇健康推進課

- 昨年５月から本年３月中旬までに、延べ４５０名がサポーターとして活動されている。当日だけでなく事前準備を行われるなど、精力的に活動されている。

〇委員

- ボランティアの方々を社会が評価する仕組みを作らなくてはいけない。

〇座長

- ランチは平均２０名程度の利用か。カフェの利用者はどの程度か。

〇健康推進課

- ランチについてはそのとおり。カフェについては平均すると２～３名／日の利用である。イベント開催日には利用者が多くなるが、それ以外の日は利用者が少ない現状である。

〇委員

- 高齢者が対象か。

〇健康推進課

- 主には高齢者が対象であるが、以前子ども向け授業を開催した際は好評であった。

〇委員

- 利用者は食事が目的ではなく、そこに行けば仲間がいるから利用しているはずであり、人が集まる雰囲気づくりが大切である。

〇委員

- 利用者の地域性はどのようになっているか。

〇健康推進課

- 毎週利用されるのは地元（武佐学区）の方であるが、徐々に全市的に広がりつつある。自治会のふれあいサロンなどでは１０名以上まとまっての利用もあるなど、口コミで広がっている。全学区で利用実績がある。

〇座長

- 地域密着のコンセプトを保ちつつ、全市的な利用の広がりがあると良い。
- 実績を見る限り、女性の利用客が多いということか。

〇健康推進課

- 一部頻繁に利用いただいている男性もいるが、全体では圧倒的に女性利用が多い。

〇座長

- サポーターを巻き込みながら着実に成果をあげつつある。次年度以降も、カフェを中心に引き続き内容の充実に努められたい。

(3)　歴史的建造物（市立資料館）を活用した観光拠点整備による地域活性化事業

〇文化観光課

事業シート№.３に基づき説明。

〇委員

- 物販やコワーキングスペースも大切だが、本来の目的である観光拠点として、今後どのように活用していくのか、方向性を伺う。

〇文化観光課

- 近江八幡市の特徴でもある歴史・文化について、展示を充実させていきたい。また、カフェスペースについても充実を図っていきたい。特別室について、現状は着付け教室と英会話教室としての利用であり、歴史・文化の観点とは異なる方向性であることから、歴史・文化に関係する利用方法を考えていきたい。

〇委員

- 歴史的建造物を活用した観光拠点とあるが、決して観光目的の施設としてだけではなく、市民の歴史を残していくための、また誇りに思える施設であって欲しい。

〇座長

- 観光施設として何を核にしていく考えなのか、先ほどの説明では今ひとつ分かりづらい。また、市民のアイデンティティーを育むための施設としては、どのような利用を想定しているか。

〇文化観光課

- 訪れた方に歴史を伝える資料館としての機能に加え、物販においても地元産品の販売や地元食材を食してもらえるなど、観光面での工夫を行っている。

〇委員

- 観光客の滞在・周遊時間が短いという状況において、観光客は訪れる先を吟味して訪問されている。現状、当該施設は人を惹きつける施設になり得ておらず、周辺に新しい人の流れを作れていない。今後、地域の各施設が連携する、地域住民の理解を促すなどの工夫が必要。せっかくの宝も磨かなければ意味がない。
- 大正琴の開催スケジュールはどのようなものか。

〇文化観光課

- 若い奏者によるエレキ大正琴の演奏会を月１回開催している。

〇委員

- 観光だけに囚われすぎない方が良い。市民がもっと自分たちのまちの歴史に関心を寄せるようにしなければいけない。市民が市外の方に自然と案内する施設になれば、観光への効果は後から付いてくる。

〇文化観光課

- 施設を改修するにあたり、修学旅行や企業の視察研修の受入れも想定して進めてきた。市民による利用については、先日、観光ボランティアガイド主催の講座が開催されたが、これをきっかけに観光ボランティアガイドとして入会された方もいたなど好評であった。このように、市外の方をお迎えする意識を持つ方が今後増えていけばと考えている。

〇座長

- 地方創生拠点整備交付金は昨年度終結しているが、今年度についても維持管理費等は発生していると思われるがいかがか。運営方式はどのようになっているか。

〇文化観光課

- 指定管理制度を採用しており、指定管理料が費用として発生している。

〇座長

- まとめると、市民が近江八幡の歴史や文化を学ぶことのできる施設であることが、ひいては観光にとっても魅力的な施設になるというご意見であった。今後、それを踏まえて事業推進されたい。

(4)　インバウンド観光プラットフォーム策定業務
(5)　着地型体験ツアープラットフォーム策定業務
(6)　駐車場案内・交通案内システム構築業務
(7)　観光消費額等調査業務
(8)　インバウンド観光サイン調査分析業務

〇文化観光課

事業シート№.４～８に基づき説明。

〇委員

- なぜ観光が重要なのかについて、しっかりと議論してほしい。観光で訪れた人に消費してもらうことが大切なのであり、消費してもらったお金が地域内で循環する仕組みが重要である。観光消費額が地域全体で回ることが、地域住民に見えないと、観光客を増やそう、もてなそうという意識に繋がらない。
- 都市経営の戦略として観光を位置付けることが明確になると良い。
- 旅ナビアプリについて、観光に来た人向けではなく、観光に来ようと検討している人に見てもらえるものであるべきである。例えば、自動車よりも電車で行った方が利便性が良いといった判断材料を提供できると良い。それが観光サインなどと連動すると尚のこと良い。
- 様々な取組を行っているのは分かるが、それぞれの事業が意識として繋がっていない印象である。

〇文化観光課

- 旅ナビアプリについては、委員のご指摘の通り、事前にダウンロードしてもらえる内容とし、交通案内等の充実を図ってまいりたい。

〇委員

- ＱＲコードでのダウンロード案内などは行っているか。

〇文化観光課

- パンフレットに掲載しているもののダウンロード数に繋がっていないため、パンフレット刷新の際に掲載方法を見直す予定にしている。

〇委員

- しっかりとした計画策定、及び情報発信できる人材を４００万円で呼ぶのは無理がある。既に立ち上がった他地域のＤＭＯを見てみても、人件費に苦慮している。

〇文化観光課

- ＤＭＯの類型としては３種類存在する（広域連携ＤＭＯ、地域連携ＤＭＯ、地域ＤＭＯ）。近江八幡市は地域ＤＭＯとして立ち上げをめざしており、今後の継続した財源確保を考えていかなければならない。

〇委員

- 一時的な補助金を当てにして立ち上げると、後々苦慮することがあるので、十分注意されたい。

〇座長

- 計画された５事業の内、３事業までもが未実施というのは当初計画が甘かったと言える。
- 事前リサーチ不足を認識して次に活かしてほしい。
- ＤＭＯ候補法人として近江八幡観光物産協会が予定されているが、未実施３事業について一旦観光物産協会で事業実施し、ＤＭＯが設立されたタイミングで引き継ぐということはできなかったのか。

〇文化観光課

- 専従職員の人件費については、観光物産協会にも負担してもらう予定であった（半額の２００万円）。観光物産協会としては、限りある財源の中で高額な専門家を短期間雇用するのではなく、長期の雇用が可能となる若手を雇用し育成したいとの方針があった。これもミスマッチを引き起こした要因となった。

〇委員

- 観光物産協会もベースを広げようとする動きがあったが、良い判断だと評価

する。現状、観光に関わりのある会員ばかりであり、裾野を広げてみるべきである。

- 事業数も多く、整理してみてはどうか。

〇委員

- 何が観光振興に結び付いているのか、今一度各事業の組み立て直し、整理が必要だと考えている。

〇委員

- 近江八幡市には見直すべきことも多くある。世界一美しい村と言われるイタリアの村にも資料館があるが、そこでは住民が展示品を持ち寄り運営している。近江八幡でも資料が住民と共にあるような仕組みができると良い。

〇委員

- 歴史まちづくり計画の策定を予定しており、文化財の掘り起こしも計画している。眠っている資料も出てくるだろうが、資料館に展示しきれないという問題も出てくる。

〇座長

- 未実施事業に係る交付金は繰り越すなどの措置は取れるのか。

〇文化観光課

- 不可であり、請求できないことになる。

〇座長

- ５つの事業は相互に連携しており、資料館も含め近江八幡市の観光施策としてトータルに考えていく必要がある。
- ＤＭＯの設立が間に合わなかったことを一つの契機と捉えて、事業を整理して進められたい。

(9)　「沖島・びわこ」教育旅行観光プログラム

〇学校教育課

事業シート№.９に基づき説明。

〇委員

- ３月末のモニターツアーの企画・実施主体はどこか。

〇学校教育課

- 滋賀県立大学が企画すると聞いている。

〇委員

- 子供たちや一般の方々は関わらないのか。

〇学校教育課

- 関わりはあるように聞いているが、現状では報告を受けておらず、はっきりとは把握できていない。

〇委員

- これまでまとめてきたものの成果は何か。

〇学校教育課

- 湖島婦貴の会や漁業組合の協力を得られたことで、活動の幅が広がった。今後も同様の活動を継続することの意義を見出せた。

〇委員

- 滋賀県立大学の取組だけでなく、市としてプログラムを作り上げていくことができれば、成果として残していくことができる。市としてノウハウを蓄積されたい。

〇座長

- 観光プログラムということであるが、最終的な狙いは日帰りであっても沖島の魅力を知ってもらうことであり、宿泊客を増やそうとするものではないとの理解でよいか。

〇学校教育課

- そのとおりである。

〇委員

- 教育・旅行・観光では意図が分からない。子供を中心に行うのであれば「学習」という言葉を取り入れてほしい。学習プログラムをしっかりと組み入れるべきである。

〇学校教育課

- 他府県からの修学旅行や校外学習の場としても取り入れてもらえるようにとの意図である。

○委員

- 今回の成果を生かして、ツアー化に取り組んでもらいたい。

(10) 空き町家リノベーション事業

○商工労政課

事業シート№.１０に基づき説明。

○委員

- 想像以上に深刻な課題である。一気に取り組まないと、２～３年もすると手がつけられなくなる。
- 関係者が２００名いると言われているが、所有者自身もどうしていいか分からなくなっている。
- 既に生活する上でのコミュニティーが機能しなくなってきているにも関わらず、市民でさえも限界集落だとは思っていない。
- エリアのまちづくり計画を一気に作り、進めていく必要がある。誰もが住みたくなるような全体計画を作って進めれば、近江八幡市でビジネスを行う人は多くいるはずである。
- 市が音頭を取り、空き町家所有者を含めた関係者の合意を取る必要がある。

○委員

- 空き町家は相続問題である。生存されている内に相続してもらうなり、登記を整理してもらうなりしないと、あっという間に関係者が膨れ上がり、収拾が付かなくなってしまう。空き家にならないための水際作戦が非常に重要である。
- 空き家になる危険性のあるものをリストアップして、手立てを講じていく必要がある。
- チャレンジショップやまちなかゼミも大切であり否定するものではないが、空き家を増やさないための対策がより重要であり、優先順位を改めて検討すべきである。

○委員

- 相続はしたが住んでいない人に、まちに対する愛着はない。

○座長

- 面的に空き町家のことを考えることが必要である。商工労政というより、都市計画の視点から、エリア全体を構想していく必要があるだろう。

〇委員

- エリア全体で構想すれば、やりたいことがある人は多くいるはずである。

〇委員

- 地域の方々が危機意識をもって何かされる場合に応援できる仕組みが必要である。単体でやるには難しいので、面として取り組む必要がある。

〇座長

- 面的な取り組みが必要という意見を庁内で共有してほしい。リノベーションした建物の活用については、ＫＰＩを立てて取り組まれたい。

(11)　八幡商人育成事業

〇商工労政課

事業シート№.１１に基づき説明。

〇座長

- 今年度の起業実績はどうか。

〇商工労政課

- 意欲的に取り組んでいただいている方はいるものの、起業にまでは至らなかった。

〇委員

- ミニ勉強会を１６回開催と非常にきめ細かいフォローをしているにも関わらず、成果（企業数）が０件なのは、どのような理由が考えられるか。

〇商工労政課

- 参加者の中には起業寸前まで漕ぎつけられている方もいる。また、受講以前に既に起業されている方がいたことも指標として成果とならなかった要因である。

〇委員

- 私の見る限り、本当に起業しようという人は少ない。
- 事業名のとおり八幡商人を育てるのであれば、八幡商人の何を取り入れるのか、特色付けを考えなければいけない。それを突き詰めれば、何か結果が変わるかもしれない。

〇委員

- 参加者には起業を考える人だけではなく、親の跡を継ぐため、今の仕事をステップアップさせるヒントを得に来ている人もいるはずであり、その人達の役に立っているのであれば役割を果たしている。

〇委員

- 商工会議所では本当にやる気のある人に参加して欲しいと言っている。本気の人は最後まで面倒見ると言っているが、やりたいという人はいないのが現状である。非常に難しいテーマである。

〇座長

- 参加者へのアンケートは行っているか。

〇商工労政課

- 行っている。

〇座長

- 次回はアンケート結果も提示してもらえると良い。

〇商工労政課

- 参加動機は把握しているが、参加しての評価までは聞いていない。

〇座長

- どのような講座がよいか、講座自体の評価を聞いて、次に生かすこと大切である。

〇委員

- 同じような講座を聞いたことがあるが、手続きの説明など退屈で気の滅入るような話ばかりであった。

〇商工労政課

- 参加者の意見としては、異業種交流会の開催や、経営を続けるための心構えを教えて欲しいなどのコメントがあった。

〇座長

- 受講者のアフターフォローをしっかりとされたい。

(12)　先進的農業者づくり塾事業

〇農業振興課

事業シートNo.１２に基づき説明。

〇委員

- 受講者１２名の属性と、受講後の評価はどうであったか。

〇農業振興課

- 前年との違いとして若手の参加が多くあった。農家レストランの経営を見据えた方や、６次産業化のノウハウ習得をめざす方、集落営農組合の新しい取り組みを模索している方など、高い志を持った意欲ある方が多かった。

〇委員

- その結果を受け、どのような周知をしたことが若者の参加を促したのかなど、事業内容の検証を行い、今後に活かしてもらいたい。

〇農業振興課

- これからの担い手を育成することが最も大切と考えており、農業の魅力、儲かる仕組をレクチャーしてもらえるよう工夫して取り組んだ。

〇委員

- 農を金に換算しては担い手は集まらない。農に魅力があることは間違いなく移住して就農する方もいる。そういった方はお金ではなく、ライフスタイルを変えようとしているので、近江八幡の魅力に訴えた発信を行うことが必要である。
- 現実はほとんどの農家が営農組合に委託しており、実際に農に携わっている人はほぼいない。一旦離れた人が戻ることはまずない。

〇農業振興課

- 専門的に何十ヘクタールと展開される方と、営農組合に入る方に２極化している。
- 新たに就農しようとすると設備で多額の費用が必要となりハードルが高い。本市としては、後継者のマッチングに力を入れたいと考えている。

〇委員

- 受講生の次のステップが大切であり、６次産業化につながるようなアフターケアが必要となる。
- 農業にはリスクがある反面、収穫の喜びも人生にはかけがえのないものであり、

それを伝えることができるよう進めてほしい。

〇座長

- 就農インターンシップについて、参加者はなかったとのことであるが、問合せはあったか。

〇農業振興課

- なかった。農業大学校にも案内したが、学校独自に取り組まれていることもあり、紹介は難しかった。

〇座長

- 次年度以降、近江八幡に来られる方、来たいと考えている方へ訴求できるような内容として進められたい。

(13) 未来づくりキャンパス事業

〇政策推進課

事業シート№.１３に基づき説明。

〇委員

- 参加者の評価もよく、意義ある取組だったと思われる。
- このような事業では足りないものを見つけ、それを課題化していくという手法が取られがちであるが、受講生の良いところを見つけ、そこを伸ばしていくという着眼点も必要である。

〇委員

- 高校生の参加も多いが、上手にプレゼン資料が作成されている。

〇委員

- 高校生など若者が参加することは、将来地元に戻ってくる可能性を高め、人口定着にも繋がる。

〇座長

- 平成２８年度、２９年度から連続して参加した方もいるのか。一度受講した方は２度目の受講はできないのか。

〇政策推進課

- 連続しての受講は可能である。継続して受講することで学びを深めてもらい

たいとの考えもあり、過去の受講生にも案内を行っている。

- 今年度、再度受講した過去の修了生は２名。どちらも入門コースでの受講であった。
- 事務局では修了生と受講生を結びつけるフォローアップの体制づくりを課題として捉えている。

〇委員

- ＯＢ会のような組織が、修了生により自主的に作られると良い。

〇座長

- 本事業から生まれたアクション３件とはどのような内容か。

〇政策推進課

- ポンプ小屋を改修した高齢者や子供の居場所づくり、農園シェアリング、農業に携わる人を増やす仕組みづくりの３件である。
- 今年度受講生では、５チーム中４チームが継続活動予定である。

〇座長

- 若者の意欲が更に広がるような取組にしてもらいたい。他の分野との横の連携を大切にして活動を広げられたい。

(14)　安寧のまちづくり（ＣＣＲＣ）推進事業

〇政策推進課

事業シート№.１４に基づき説明。

〇委員

- 来たら何をしてもらえるのかというスタンスの人が多い。自分はこんな暮らしがしたいから近江八幡市に移住したいと思う方に来てもらいたい。
- 今進めている事業計画を見るに、ＣＣＲＣでなくても良いのではないか。

〇政策推進課

- 単なる宅地造成ではなく、バリアフリー化など高齢になっても住まい続けられるまちづくりを計画し、ＣＣＲＣとして進めている。

〇委員

- わざわざ東京から呼ばなくとも、滋賀県内でも高齢化は進んでおり、県内でも住み替え希望はあるのではないか。東京でのプロモーションは不用とも思

える。

- 都市部から来られるなら、地域で活躍することを希望し、それを喜びに感じられる人に来てもらいたい。

○座長

- 計画の理念に合致する人を呼んでくることが重要。現在進めている「静かな水辺で暮らす」についても人が集まる可能性は十分あると思うが、理念に従い、どのような人が来てくれるかを考えることが大切である。

○委員

- ＣＣＲＣをどのように受け止めるかである。米国で生まれたＣＣＲＣは元々は都会で活躍した富裕層が、田舎に移り住み余生を穏やかに過ごすという考え方であったが、これを日本の風土にどう合わせていけるか考えなくてはならない。
- 高齢者のまちにするのか、多世代のまちにするのか考えなくてはならない。ＣＣＲＣに拘るのではなく、「安寧のまちづくり」として進めていくべき。
- 一つの世代だけが集中したまちは、数年後にだめになる。

○政策推進課

- 本市としては多世代のまちづくりで進めたいと考えている。

○委員

- 賛成するが、元来のＣＣＲＣの理念とは食い違うことになるので、整理をしておく必要がある。
- 『ＣＣＲＣ（安寧のまちづくり）』ではなく、『安寧のまちづくり（ＣＣＲＣ）』としてはどうか。

○委員

- ワーキンググループの内容はどのようなものか。
- 地域との連携、調整が必要である。例えば、地元で減農薬で頑張っている農家に対して、意識の高い都会の富裕層の方がどのような反応をされるのかなど、心配事は少なからずあると思う。地元との調整役が必要と考える。

○政策推進課

- ワーキンググループには、計画を作る事業者と、地域の代表者に参加してもらい、どのようなまちづくりができるのかを議論している。
- 地元自治会の方々にも傍聴してもらい、毎回必ず傍聴者からも意見を伺うようにしている。
- 心配事を解消できるよう、計画を進めるにあたっては、今後も多くの方の意見を聞いていく必要があると考えている。

〇委員

- プラン内容を見ていると、ＣＣＲＣの理念から外れているようにも感じる。駐車スペースが２台分確保されており、車移動を前提としているように見受けられるが、ＣＣＲＣの理念に沿うならば、車を使わずとも生活ができるよう公共交通を整備していく発想であるはずである。
- コンパクトで歩きやすいまちをめざすのであれば、公共交通の整備を取り入れる必要がある。

〇政策推進課

- 協議会の有識者からも、周辺の公共交通と歩道の整備について意見をいただいており、一つひとつクリアしていきたい。

〇委員

- スマート交通を取り入れることで、リードしてもらいたい。

〇座長

- 周囲と調和しながら、新しいまちづくりに取り組んでもらいたい。
- どのような方に来てもらいたいのか、市の意見だけではなく、地域の意見を聞きながら調整して進められたい。

３．全体意見交換

〇委員

- 人材育成については行政の仕事として分かりやすく、具体的な事業が多くあった反面、プラットフォームを構築するような事業については中身が生煮えのものが多い印象であった。地方創生の考え方からすると、ヒトをどう作っていくのかに力を注いだ方が、長期的に見て財産になるのではないかと思う。
- 人口が減少する中で、近江八幡市内のアクティビティをどう活性化させていくかについての考えが、全体を通してもう少し出てくると良い。

〇委員

- 事業間でも連携できるところは情報交換し、繋がっていけば、より良い事業になる。
- 観光については人材確保など、難しい課題も多いが良い方向に向かうことを期待している。

〇委員

- 官民連携は進んでいない。もっと市民を取り込んでいくことを考えてほしい。

- 市民の責任についても考えなければならない。
- みんな一緒にやることに慣れていないのであって、行政にはどうすれば一緒にできるのかを考えて進めてほしい。
- 既に活動している団体や人を評価する仕組みが必要。やらせるのではなく、やってもらえるように進めることが大切である。

〇座長

- 市民の主体性を生かして進めてほしい。
- 策定中の総合計画にも沿って、市民を巻き込みながら地方創生を進めてもらいたい。

４．閉会

（スケジュール確認）

〇事務局

長時間に亘り、評価・検証をいただきありがとうございました。

本日の議事内容につきましては、議事録として取りまとめ、後日ご報告させていただきます。

また、各事業担当課におきましては、本日いただいたご意見を踏まえ、次年度以降の事業を進めていただきますよう、よろしくお願いいたします。

次回の懇話会につきましては、昨年度同様に事業開始前の開催として、６月頃の開催を予定しております。詳細につきましては、時期が近づきましたら、ご案内申し上げますので、よろしくお願い申し上げます。

以上で、平成３０年度第２回近江八幡市まち・ひと・しごと創生懇話会を閉会いたします。本日はありがとうございました。

以上